

グローバル人材育成のための教育プログラム構築への提言

図 2：建学の理念とフィールドスタディの位置関係

本報告書の冒頭で述べたように、地球規模のさまざまな課題と直面している国際社会において、今日の日本が十分な人的貢献をしているとは言い難い状況にある。こうしたなか、大学レベルで国際的に活躍する人材を育成することには、大きな意義があると考えます。本報告書で取り上げた教育プログラムをはじめ、グローバル人材育成のための多様な教育プログラムが多くの大学で展開されている。そうしたプログラムで学び、ボランティアやインターンなどの実践経験を積んだ学生たちのなかから、将来、国際協力分野へと積極的に進んでいく若者たちが次々に輩出されていくことを期待したい。

そこで、本調査研究の各事例報告ならびに研究アドバイザーからの各コメントを踏まえて、これからグローバル人材育成のための教育プログラムを構築しようと検討している大学や、現在そういったプログラムを運営しているがさらなる改善の必要性を感じている大学などに対して、簡単ではあるが「提言」という形でいくつかの留意点を提示することで、本報告書の結びとしたい。

これらの提言では、各大学が教育プログラムの開発や発展を目指すうえで主体的な努力をしていくということを前提にしているが、それと同時に、そういった各大学の取り組みに対して行政や企業の側からも積極的な支援を行っていくことを期待している。したがって、本報告書を結ぶにあたり、大学、行政、企業をはじめとした多くのステークホルダーたちが連携・協調しなければ、グローバルに活躍する人材を次の世代の若者たちの間に一人でも多く育てていくことは不可能であることを、改めて強調しておきたい。

提言 1 教育プログラムの理念を明文化すること

グローバル人材育成プログラムの理念を、関係する教職員・学生・連携パートナーの間で十分に議論をしたうえで、明文化すべきである。その際、大学全体や学部・研究科などの組織的な理念や使命との関連性を明確化することで、長期的なビジョンを示すことが重要である。

提言 2 教育プログラムの目的と内容が明確であること

プログラムに参加する学生たちにとって、どのような意義をもち、どのようなキャリア形成につながっていくのかということ、明確に描けるような「目的」と「内容」を提示することが重要である。

提言 3 教育プログラムのなかで語学力や専門性の向上を図るための支援をすること

グローバルに活躍する人材の基本的な要件として、英語をはじめとした外国語の運用能力や、それぞれの専門分野における高度な知識・技能が求められている。それらの能力の向上は、必ずしも当該プログラムにとっての中心的な目標ではないかもしれな

いが、参加する学生たちがそれらの能力を向上させるうえでどのような支援を行うことができるか、プログラムのなかで検討することは重要である。

提言4 カリキュラム構成が柔軟であり、学生たちの主体性を尊重すること

プログラムへの参加を通して到達しようという目標に関して、大学側が画一的・硬直的な到達点を設定してしまうのではなく、参加する学生たちが主体性をもって自らの目標を掲げることができるよう、カリキュラムの構成に柔軟性をもたせるべきである。

提言5 持続的・継続的な教育プログラムであること

プログラムの内容に持続性・継続性をもたせることで、そこで培われていくノウハウが将来にわたって継承されていくことが重要である。そのために、学生たちの間でも、同期の横のつながりだけでなく、先輩・後輩といった縦のつながりが確立されることが必要である。また、教職員の間でも、プログラムの運営が一部の教職員に偏り過ぎない工夫や、プログラムの意義や重要性が広く学内で共有されるような仕組みを構築することが大切である。さらに、財源面に関して、中・長期的な視点に立った財源確保のメカニズムの構築が不可欠であり、そのためには大学独自の財源を確保するとともに、行政や企業といった外部からの資金を獲得する機会が十分に提供される必要がある。

提言6 教職員に対して能力開発の機会を提供すること

学生たちの「体験」を主体的な「学習」へと変えていくために、学習手法としての体験型活動に関するファカルティ・デベロップメント（FD）やスタッフ・デベロップメント（SD）を積極的に行い、教職員が新しい学習のあり方についての理解を深めることが必要である。また、グローバル人材を育む学習・学生支援に関する知識や経験を蓄積・整理するとともに、こうしたFD/SDを通してそれらを学内で共有し合うことが重要である。

提言7 教育プログラムへの留学生の参加を奨励すること

教育プログラムの対象を、「日本人のみ」と限定するのではなく、留学生の参加を奨励することが重要である。それは、留学生たちの視野を広げるという意味のみならず、ともにプログラムに参加する日本人学生たちにとっても大きな刺激となることが期待される。同様のプログラムに参加しても、日本人学生たちと留学生たちとの間で異なる見方や感想をもったりすることがあり得るため、そうしたお互いの経験を共有し合う機会を積極的に設けることが大切である。

提言8 双方向性をもつ多角的な教育プログラムであること

プログラムへの参加者たちに新たな「きっかけ作り」の場を提供することが重要であり、日本側の学生たちにとっての利益だけでなく、プログラムの連携相手先（海外の大学、国際機関、国際援助機関、NGOなど）にとっても意味のある、双方向的な意

義づけをもったプログラムを構築することが重要である。

提言 9 教育プログラムに参加した学生たちへのフォローアップの仕組みをつくること

プログラムに参加した学生たちに対して、事後研修やキャリア・ガイダンスをはじめとするフォローアップを行うとともに、関連分野に就職した卒業生たちの人的なネットワークの構築も進めることで、現役学生と卒業生との交流や、卒業生同士の交流などの機会を積極的につくっていく。こうした仕組みを通して、プログラムがさらに発展していくことが期待される。

提言 10 グローバル課題に関する研究開発とグローバル人材育成プログラムを有機的に連携させること

グローバル人材の育成は、将来的なグローバル課題についての実践的なオリエンテーションを有する研究者の育成につながる。また、研究と人材育成の連携が、プログラムの質の向上や発展、教員のインセンティブや資金リソースの確保につながることを理解し、プログラム策定において工夫を行う必要がある。

以上